

# 「信仰と共に高嶺を目指す」

先々週、私達は神様がアブラハムに語りかけ、彼はその年が75歳でありながらも、未だ見ぬ地に向かい、信仰と共に歩みだしたということをお話ししました。その時にアブラハム夫妻と共に行動をした人にアブラハムの甥ロトがいます。今日はこのロトを見ていきたいと思います。まず最初に「見えるところに従った結末」ということを見てまいりましょう。

## 見えるところに従った結末

神はアブラハムが75歳の時に彼に語りかけ、彼はその言葉を信じて妻、サラとともに住み慣れた地、ハランを出ていきました。その時に共に歩んだ人がアブラハムの甥ロトでした。彼らはしばし旅を共に続けますが、ある日、アブラハムとロトは別れて暮らすという選択をします。事の経緯はこうでした。

アブラハムが妻サラ、そしてロトと共にネゲブに来た時に彼らは共に大きな財産を持っていました。当時の財産とはすなわち家畜のことで、二人が所有する家畜に必要な草や水の分配が難しくなったのです。ゆえに彼らはそのことで争うのではなく、穏やかに別れるという道を選びました。アブラハムは年長者であったにもかかわらず甥のロトに「あなたが右に行くなら私は左へ行く」と土地の選択の優先権をロトに譲りました。その時のことについて創世記はこう記しています。

10 ロトが目を上げてヨルダンの低地をあまねく見わたすと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったから、ゾアルまで主の園のように、またエジプトの地のように、すみずみまでよく潤っていた。11 そこでロトはヨルダンの低地をことごとく選んで東に移った。こうして彼らは互に別れた。12 アブラムはカナンに地に住んだが、ロトは低地の町々に住み、天幕をソドムに移した。13 ソドムの人々はわるく、主に對して、はなはだしい罪びとであった（創世記13章10節-13節）。

ロトはソドム・ゴモラがまるでエデンの園のように豊かに潤い、緑が生えているように見えたので、ソドムを選び、そちらへと向かいました。彼はそこでさらなる繁栄を得ることができると思ったのでしょう。と言いましてもロトはよそ者ですから、最初はソドムの郊外に天幕を張り、少しずつソドムの町の人達との関係をつくり、やがて町の中に住むことが許されるようになったのでしょう。ソドムの女と結婚し、子供も与えられました。このようなことを想像しますとロトが異国で家族を得て、幸いな生活を送っているように私達には思えます。しかし、聖書はとても気になる言葉を一言、書き残しています。そう、『13 ソドムの人々はわるく、主に對して、はなはだしい罪びとであった』（創世記13章10節-13節）ということです。

ある日の夕暮れ、ソドムの門に座っていた時（その町の門に座るということは、彼が既に町の長老的な存在となっていたということがうかがい知れます）、ソドムを訪れた二人の旅人（彼らは神がソドムの様子を知るために遣わした御使いです）に対してもてなしをし、その晩は広場で眠るという彼らを強いて自宅に招きます（この御使いは広場に一晚いることによりこの町がどんな町であるかを知ろうとしたのでしょう）。

日が暮れ、夜になりますと町のあちこちから若い者から年寄りまでがロトの家にやってきまして家を取り囲み、『今夜、お前の所に来た人々はどこにいるか。それをここに出しなさい。我々は彼らを知るであろう』（創世記19章5節）と言いました。この「知る」という言葉は聖書の中で度々使われる言葉なのですが、それは性的な関係を持つという言葉で、ロトの家の周りを囲んだ男達がこの二人の男を強姦しようとして来たのです。

英語には「Sodomy」という言葉がありまして、これはアブノーマルな性的行為が人間や動物に向けられるという言葉であり、この言葉はこのソドムから来ているのです。。そう、この町は性的に墮落しており、人々はあらゆるものと乱交し、近親相姦が当たり前のようになされている町だったのです。先の御使いは自らがその男達に襲われるという経験をし、神はいよいよこのソドムの邪悪さを知り、それを滅ぼされるのです。

なぜロトはこんなソドムに住み着いたのでしょうか。そうです、『10 ロトが目を上げてヨルダンの低地をあまねく見わたすと、主がソドムとゴモラを滅ぼされる前であったから、ゾアルまで主の園のように、またエジプトの地のように、すみずみまでよく潤っていた』（創世記13章10節）からです。

確かに目に見えるものは私達の心に訴えます。見えるものに私達は心動かされ、そのことにより人生の諸々の決断をします。そして、その多くの決断は正しいものでありましょう。「百聞は一見にしかず」という言葉がありますように、見るということはとても大切です。しかし、時にそこに落とし穴があります。中には見えるところは良かれども、そこに内在している問題に気がつかずに窮地に陥ってしまうことがあります。ロトがソドムを選ぶ時、彼の目にその町は隅々まで潤っている素晴らし土地に見えました。しかし、実際のところその町はとんでもない町だったのです。

エデンの園にて、禁断の実を前にしたエバについて創世記はこう書き記しています『女がその木を見ると、それは食べるによく、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われたから、その実を取って食べ、また共にいった夫にも与えたので、彼も食べた』（創世記3章6節）

その実はエバの目に美しく、美味しそうで、さらにはそれを食べたら賢くなるように見えたゆえに彼女はそれに手を伸ばして口に運びました。ご存知のようにこの時から人に罪が入りました。彼女は自分が見てよしと思われる実を食べたということを私達は心に刻まなければなりません。

イスラエルの二代目の王、ダビデが神様から選ばれる時のエピソードを私達は知っています。ダビデはエッサイの末っ子で、いざその兄弟の中からイスラエルの王を選ぶという時に、その選ばれる候補者の数にも入っていませんでした。人の目には彼はまだまだ若く、力もない者のように見えました。そんな人の心を知る神は言われました。『わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る』（1サムエル16章7節）。この武具も持たない少年ダビデが、鎧を身にまとった巨人ペリシテ人、プロの軍人であったゴリアテの前に立ち、彼と一対一の決闘をするという時、誰一人としてダビデの勝利を思い描いた人はいなかったでしょう。しかし、その勝利はダビデと共にありました。

イエス・キリストはガリラヤのナザレという町で育ちました。ガリラヤは暗黒の土地で、都エルサレムから見れば、まさしく立ち遅れている未開の地と呼ばれている場所でした。ですからイエス・キリストがナザレの出身だと聞いた者達は口々に言ったものです『ナザレから、なんのよいものが出ようか』（ヨハネ1章46節）

イエス様が弟子達とエルサレムの宮を歩いている時に、弟子の一人が、その神殿があまりにも見事なので言いました。「先生、ごらんなさい。なんという見事な石、なんという立派な建物でしょう」。これに対して2イエスは言われた、「あなたは、これらの大きな建物をながめているのか。その石一つでもくずされないままで、他の石の上に残ることもなくなるであろう」。(マルコ13章1節-2節)。イエス様は荘厳に見えている神殿の見事な石垣でさえも、いつの日か崩されると言われ、そのことは後に実現したのです。

イエス様が十字架にかかる時の様子を預言者イザヤはこう予言しました。『彼には我々の見るべき姿がなく、威厳もなく、我々の慕うべき美しさもない』（イザヤ53章2節）。しかし、この見るべき姿なく、威厳もなく、私達が慕うべき美しさをそこに見出すことができなかつたイエス・キリストのうちに私達の救いがあったということを私達は知っています。

皆さん、「見た目はよかったのに、実際は・・・」という経験をなさったことがあるでしょう。「あれもこれも自分の目にはことごとくよかった。これで人生安泰だと思った。自分はなんてラッキーなんだろうと思った」。しかし、後になって、そんなこ

とはなかった、いや、そのことゆえにとんでもないことになったというようなこと、私達の人生に一つや二つはあるのではないのでしょうか。

人生の諸々の経験を数多くしてきた皆さんはきっとこのことに気がついているでしょう。だからといってどうしたらいいのか分からないという方もかもしれません。そこでここで皆さんにこんな生き方のお勧めです。『わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである』（コリント第二の手紙5章7節）。

聖書が語るように見えるところによらず、信仰によって歩む生涯へと私達の人生をシフトしていくことをお勧めします。私達は見えるところにより頼んで歩んでいるのではなく、未だ見ていないものをあたかも見ているかのごとく、信仰の目をもって歩んでいる者だからです。

私達は今の時代を不透明な時代と呼びます。そうです、行く先が見えないのです。そう、このように私達がいる世界そのものが不透明で見えないのなら、私達には見えない世界を見ていく目が必要なことは言うまでもありません。そして、その見えないものを見るようにしてくださるといのが聖書の約束なのです。この霊の視力が与えられていることが、私達にとりましてどんなに大切なことかということは、何度繰り返し申し上げても足りないほどです。

信仰生活を送る、教会生活をおくるといことはすなわち、この信仰の目が養われるということなのでしょう。このことを突き詰めていく学問や学位はありませんが、私達がコツコツと聖書に養われていくのなら、自ずとこの目が養われ、それは徐々に私達の日常生活の中にも浸透していきます。そして、ここぞという人生の節目であるとか、生死が関わるような危機の時に、とてつもない力を私達に与えてくれるものなのです。これからも私達の目の前には色々なものが通り過ぎていくことでしょう。私達はそれらのことで一喜一憂するわけですが、そのことだけに心を奪われてしまうのではなくて、その背後にある見えないものを見ていこうではありませんか。

二つ目の事をお話しします。それは「高嶺を目指して」ということです。お話ししましたようにソドムに偵察に来ましたみ使いはその町が墮落しきっているということを知ります。そこで神はいよいよこのソドムを滅ぼします。

14 そこでロトは出て行って、その娘たちをめとるむこたちに告げて言った、「立ってこの所から出なさい。主がこの町を滅ぼされます」。しかしそれはむこたちには戯むれごとに思えた。15 夜が明けて、み使たちはロトを促して言った「立って、ここにいるあなたの妻とふたりの娘とを連れ出しなさい。そうしなければ、あなたもこの町の不義のために滅ぼされるでしょう」。16 彼はためらっていたが、主は彼にあわれみ

を施されたので、かのふたりは彼の手と、その妻の手と、ふたりの娘の手を取って連れ出し、町の外に置いた。17 彼らを外に連れ出した時そのひとは言った、「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない。低地にはどこにも立ち止まってはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」（創世記13章14節－17節）。

ロトには二人の娘の義理の息子となるであろう男達がありました。しかし、彼らはソドムが滅ぼされるということを「戯れ事のように」聞いていました。ゆえに朝となりいよいよその町が滅ぼされるという時に、かの御使いはロトとその妻、そして二人の娘の手だけを取り、町の外に出たのです。このあたりを読んでいますと、ロトはためらって御使いの言葉に積極的に聞き従わなかったように思えます。状況から分かりますように、彼らは着のみ着のままでソドムを出なければならなかったのでしょうか。ロトも義理の息子達のように戯れ事のように感じて射たのでしょうか。ソドムで蓄えた財産に未練があったのでしょうか。

二人の御使いは彼らの手を取り、町の外までは連れ出しました。しかし、それにしてもなぜ御使いはこんなに懇切丁寧にロトとその妻、また娘達を救おうとしたのでしょうか。『主は彼にあわれみを施されたので、かのふたりは彼の手と、その妻の手と、ふたりの娘の手を取って連れ出し、町の外に置いた』（創世記13章16節）。そう、そのことを聖書は「主は彼にあわれみを施されたので」と書き残しています。御使い達は主のロトに対するあわれみに従い、ためらう彼らを救い出そうとしたのです。それにしてもなぜ神様はここまでしてロト達をあわれみ、救おうとされたのでしょうか。

かつて主がロトの叔父、アブラハムのこのように言われたことがありました。20「ソドムとゴモラの叫びは大きく、またその罪は非常に重いので、21 わたしはいま下って、わたしに届いた叫びのとおり、すべて彼らがおこなっているかどうかを見て、それを知ろう」（創世記18章20節）。

このことを知ったアブラハムは必死にソドムに住んでいる者達が滅ぼされることがないようにと神を前にしつこく、そのあわれみを請います。実に彼は六度も神様にソドムを滅ぼすことがないようにと、神のあわれみを懇願しているのです（創世記18章22節－33節）。もちろん、彼の心の中には甥ロトとその家族のことが第一にあったに違いありません。そして、神様もそのことをよくよく知っておられたに違いありません。

それゆえ、このアブラハムの心に対して神様はロトとその家族にあわれみを注がれたのです。ためらっている者達の手を御使いが掴み、彼らを災いから救い出すといううなことはあまり聖書の中には記されていないことです。

こうして彼らはみ使いたちにより町の外にまで連れ出されましたが、彼らをその所ま

で連れ出した御使いは言ったのです。「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない。低地にはどこにも立ち止まってはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」。

御使いは言いました。これから先は逃れて自分の命を救いなさいと。そのために後ろを振り返ってはならない。低地にとどまらず、山に、すなわち高いところに逃れなさい。そうしなければあなたたちも滅びます。この後、ソドムとゴモラには何が起きたのでしょうか。そう神は天から硫黄と火を降らせ、ソドムとゴモラを滅ぼしました。そのすさまじさは低地においては決して免れるようなものではありませんでした。

主にある皆さ、逃れて自分の命を救うのは自分です。御使いは彼らと共にいて、彼らがうしろを振り向かないように、彼らの真後ろに立って、後ろに振り返りそうになった時に、それを止めるというようなところまではしませんでした。彼らは町の外まではアブラハムの執り成しに対する神様のあわれみゆえに彼らの手を取りましたが、その先は彼らが自分で自分の命を救わなければならないのです。そのために御使いは彼らに救われるためのディレクションを与えたのです。「後ろを振り向くな、低地にとどまるな、高嶺を目指しなさい」。ここから先はあなた次第だと。

皆さん、「あんなにどん底にいたのに守られた」とか「かつてはあんなにすさんだ生き方をしていたのに今はこうして内なる平安と共に生きている」というようなことが私達の身の上で起きているとするのなら、それはきっと誰かがアブラハムのように私達のために祈ってくださったからでしょう。アブラハムの執り成しにより口トとその家族が神様のあわれみを受けたように、私達も自分では気がついていないかもしれませんが、誰かの執り成しの祈りにより、今日あるのです。まさしくそれは神のあわれみです。しかし確かに私達は神の御手により、引き上げられますが、その先は低地にとどまらず高嶺を目指して自分自身で歩きなさいと主は私達に言われるのです。

彼らはこの言葉に従い、高嶺に向けて歩き出したことでしょう。しかし、口トの妻は後ろを振り返ってしまいました。その時、彼女の心にあったものは何でしょうか。私達は彼女の心にその時あったことについて、想像します。おそらく私達が想像したことが彼女の心であって、彼女は振り返ったのです。そうです、「ジョークだと笑い、一緒に来なかった義理の息子達」、「自分達が蓄えてきた財産」、「もしかしたら調理中であつた朝ごはん」が気になったのかもしれませんが。

彼女は後ろを振り返り、塩の柱になってしまったと聖書は言います。今もこの口トの妻の塩の柱がソドムの側にあります。言うまでもなく、これは本当の口トの塩の柱ではないでしょう。きっと本物は数千年の経過と共に朽ちてしまったことでしょう。しかし、荒涼とした岩山に立つその塩の柱は、後ろを振り返った人間の悲しみを十二分に私達に伝えているのです。

主にある皆さん、もしかしたら皆さんの中に「後ろを振り向くな」という言葉を今、必要としている人がいるかもしれません。それは過去の栄華であったり、過去の失敗であるかもしれません。「低地にとどまらず、高嶺を目指せ」という言葉を必要としている方がいるかもしれません。低地がどんなところか分かっている、しかし、そこから一步前に踏み出すことができない、否、今日の心理学の言葉を使っていえば共依存的なものを持っているがゆえに、誰が見ても留まるべきではないところにいつも戻ってしまう方もいるかもしれません。ですから今日、神様の言葉として「後ろを振り向くな、低地にとどまるな」という言葉を受け取り、前を向いて高嶺を目指して歩み始めませんか。

牧師をしていますと色々な方達と出会います。色々な身上話を聞かせていただきます。時にその方が直面していることや、これまでの歩みについて伺うのですが、その一、二時間でその方の人生が分かることはありません。しかし、お話しを聞いていると過去に囚われてしまっているなど思われる方がいます。そこに留まり続けていたらソドムに降った硫黄のように、問題が雨のように降りかかりますでしょうに、それでもそこから動けないという方がいます。否、そこからせっかく高嶺を目指して一步を歩き始めても、しばらくすると、またそこに戻って行かれる方、これを何度も繰り返す方もいます。

その方が教会にやってこられたということ、きっとその背後には誰かの執り成しの祈りがあったのではないかと思います。まさしく御使いに手をとられながら教会に来たのでありましょう。しかし、主はそこから先のことについて私達の決断に委ねております。そこから先は私達がどうあるかということに一重にかかっているのです。神が私達の人生になされる御心を縦糸とするのなら、私達は自らの意思と決断によって横糸をつむぎ、初めて私達の布地はできあがっていくのです。

主にある皆さん、不透明な時代と言われるこの世界に生きている私達は見えることだけで生きていくのではなく、信仰という力を獲得しませんか。これからの人生、この信仰は必ず私達を助けてくれます。私達は近い将来、この信仰の絶大なる力を知ることになるでしょう。いつも後ろを振り返り、そこから前に進むことができないというような人生に別れを告げませんか。低地にいつまでもとどまり続けて、人生を終えるのではなく、高嶺を目指そうではありませんか。私が高嶺を目指すなんて夢にも思わなかった、考えたこともなかったという方もいるかもしれません。聴こえていませんか、「高嶺を目指せ」という言葉は私達が生まれてからこの方、神が私達にいつも語りかけている言葉です。今日、この御声を聞いたのなら、すぐにそこを目指して歩き始めるべきです。そして、これらのことは私達が自ら決め、私達が自ら実行すべきことなのです。お祈りしましょう。